書評

瀬原義生著『スイス独立史研究』
（ミネルヴァ書房　二〇〇九年）

佐藤専次

すでに大著『ドイツ農民史の研究』（一九八八年）、『ヨーロッパ中世都市の起源』（一九九三年）、『ドイツ中世都市の歴史的展開』（一九九八年）を公刊され、ドイツを中心とするヨーロッパ中世の都市・農村史研究において学界に大きな足跡を残された著者の第四の著作が本書である。本書はスイス史について、その起源から一六世紀までの歴史において画期となる出来事を中心に以下の八編の章から構成されている。

第Ⅰ部　スイスの独立
第一章　ハプスブルク家の起源とその初期所領――初期スイス支配権力の実態
第二章　原スイス誓約同盟の結成――ザンクト・ゴットハルト峠の開通を視野に入れて
第三章　スイス八州同盟の成立
第四章　スイス傭兵制の開花――膨張期スイス史の一側面
第五章　シュヴァーベン戦争について――スイス独立の達成
第Ⅱ部　スイスの宗教改革
第六章　バーゼル市における宗教改革の貫徹
第七章　ツヴィングリ、ルターの聖餐論争――マールブルク会談を中心として
第八章　第二次カッペル戦争前後――スイス宗教改革の転機
補論　シュトラスブルク市における宗教改革の展開過程

本書は、『傭兵制度の歴史的研究』（一九五五年）に所収された論文を改稿した第一部第四章（「スイス傭兵制の開花」）以外、一九九九年から二〇〇九年に『立命館文学』に発表された論稿を収録したものである。

順次、内容を紹介していこう。第一章は、不明な点の多いハプスブルク家の起源に関する論文である。まず『ムーリ修道院古文書集 Acta Murensia』と『ハプスブルク土地台帳 Habsburger Urbar』を丁寧に渉猟して、北スイス・高シュヴァーベン・アルザスの領地・諸権利の分布状況を明らかにする。そのうえで、ルードルフ・フォン・ハプスブルクの王位選出当時のハプスブルク家の収入総額を算定し、その結果、傑出しているとはいえないが見劣りするものではなく、選帝侯に次ぐ財力を保持し、当時オタカール二世が下した「貧しい伯」という評価はあたらない、と見る。またこの家の起源は、アルザスのカロリング期に遡る貴族家門であった。

第二章では、原スイス同盟の結成とモルガルテンの戦いを扱っている。スイスの正式国名はドイツ語の「スイス誓約同盟 Schweizerische Eidgenossenschaft」というが、その名前のいわれは、原スイス同盟にある。この同盟の結成は、ザンクト・ゴットハルト峠の開通なしには考えられない。この峠の開通で交通の要所となったウーリ・シュヴィーツ・ニートヴァルデンの森林三州が、一二九一年に誓約同盟を結成する。これが原スイス同盟であるが、これをラントフリーデ団体として捉える近時の見解に対して、著者は「ハプスブルク家の攻勢を予知した防衛同盟の性格を強くもつ」団体とみて、通説的な見解を支持している。この同盟がモルガルテンの戦いでオーストリアに勝利し、「永久同盟」が更新され「スイス誓約同盟」の基礎が確立されるのである。

第三章は、八州同盟成立過程を詳細に追った論考。ルーツェルン、チューリヒ、ベルンの三都市が森林三州と同盟締結に至る複雑な経緯を詳細に跡付ける。

これらの都市との同盟により、またオーストリアとの関係が悪化していく。ツークとグラールスもこの同盟に加わって、オーストリアと一三八六年ゼムパッハの戦いとなる。この戦いに勝利した八州は、一三九三年ゼムパッハ協定を結び、こうして「スイス誓約同盟」は、ラントフリーデ団体の段階から領邦国家的段階へと上昇し「強固な連合国家」へと成長をとげていったのである。

第四章はスイスの傭兵制について述べたものである。ブルゴーニュ戦争とイタリア戦争において、スイス傭兵がめざましい活躍をみせ、これによってとくにフランスなどの諸国がスイス人歩兵を傭兵として雇い入れる。ルイ一四世の治世はスイス傭兵制の絶頂期であった。またここでは傭兵を生み出した社会的な基盤、傭兵募集の組織についても解明している。

第五章は、スイス誓約同盟を最終的に独立せしめた一四九九年のシュヴァーベン戦争を扱っている。南ドイツの農民・都市との関係、さらに帝国の国政との関係の中でこの戦争を取り上げ、南ドイツの中小貴族・都市からなるシュヴァーベン同盟軍ならびにハプスブルク家の皇帝マクシミリアン軍を撃退して勝利に至る経緯が述べられる。この戦争の勝利によって誓約同盟内部の結束が格段と高まり、スイスは帝国から自立した確固とした存在に達したのである。

ついで、第二部はスイスの宗教改革である。第六章では、スイスにおいてチューリヒ・ベルン・シャッフハウゼンとならんで、新教派の都市州となったバーゼル市における宗教改革の貫徹を扱う。まず改革は人文主義者らにより導入され、福音派聖職者による強力な指導があった。市参事会やツンフトはこの動きには消極的であったが、これに対して一般市民、民衆が運動の重要な推進者であった。この点が他のドイツ・スイスの宗教改革に見られないバーゼル市の特徴であった。このような性格をもつバーゼル市における宗教改革の成功は、スイス誓約同盟というその国家のあり方に起因することを著者は強調する。

第七章はケラー『ツヴングリ伝 Huldych Zwingli』（一九四三年）を翻訳したものである。ここでは、プロテスタントの統一のために、ヘッセン方伯フィリップの斡旋により、マールブルクにおいてツヴィングリとルターが討論するが、聖餐の解釈をめぐる対立から結局決裂して終わる。本章だけが、翻訳であり、全体の構成から見て、この部分だけが浮き上がった印象は否めないが、次の第八章への橋渡しを意図したものであろう。

第八章では第二次カッペル戦争に至る経緯を詳細に跡付けた論考である。ツヴィングリのドイツにおける外交政策の展開を論じながら、スイス内部での宗教対立を詳細に述べる。スイス東部の新教化に脅威をいだくウリ、シュヴィーツ、ウンターヴァルデンなどの中央五州はカトリックを維持し新教勢力と対決を深め、ついにチューリヒと五州との間で第二次カッペル戦争に至る。結局、戦いはチューリヒの惨敗に終わりツヴィングリも戦死した。これにより改革は頓挫した。しかし五州はチューリヒには寛大に対処し、各州における州当局による宗教決定権、そして宗派並存を認めた。これによって、スイス誓約同盟は宗教改革による分裂の危機を回避して同盟は維持されたのである。

以上が本書の主な内容である。著者のスイス史への関心は、五十年以上も前に書かれたスイス傭兵の論考に始まると「あとがき」に書かれているが、この関心を長らく維持して、このような形でまとまったスイスの歴史を叙述することは、誠に敬服に値するものである。本書の刊行を機に、国家形成が他のヨーロッパ諸国と異なるスイス史への関心がわが国でいっそう高まることを期待したい。

（本学非常勤講師）